

曹洞宗華蔵寺様で地鎮式

静岡県浜松市北区三ヶ日町



華蔵寺様の地鎮式の様子（平成23年7月）

去る七月二十一日（木）、静岡県浜松市北区三ヶ日町の清浄山華蔵寺様（伊原憲幸住職）で庫裡の地鎮式が執り行われました。

数日前から直撃するのではない

かと心配されていた大型の台風が進路を大きく変えたため、式典当日は少し

小雨がぱらつきましたが無事に行うことが出来ました。まさに仏天のご加護というべきでしょうか。時折晴れ間が差すと、蒸すような陽気の中、粛々と儀式は進められました。参列者は一人一人焼香して今後の工事の無事を祈りました。

上棟式は九月十日（土）の予定です。

曹洞宗龍谷寺様で地鎮式

静岡県浜松市南区飯田町

去る八月六日（土）、静岡県浜松市南区飯田町の瑠璃山龍谷寺様（笹岡賢司住職）において、庫裡書院の増築の地鎮式が執り行われました。

式典当日は天候に恵まれ、総代や世

話人を始めとした関係者に見守られる中、儀式は恙なく執り行われ、今後の工事の無事を祈願しました。

龍谷寺様では既に本堂の耐震工事が終了しており、既存の庫裡書院も増築工事終了後耐震工事を予定しています。上棟式は九月十九日（月）の予定です。



龍谷寺様の地鎮式の様子（平成23年8月）

「葬儀は誰の為に行うのか②

「お供い」とは「が開催

日本テンブルヴァン(株) 井上文夫

「全日本仏教会が

昨年についてシンポジウムを開催」

さる八月二日場所も昨年と同じ秋葉原のコンベンションホールを会場に、満席となる三五〇人の参加者を集めて開催されました。昨年活況だった同会に比べ、今年はさすが二回目ということもあり、昨年ほどの盛り上りや熱気は感じませんでした。

但し特徴的なことは、去年まで仏教界とは深い対立関係にあったイオンの葬儀事業責任者をパネラーとして出席させたこととです。さらには初めての株式会社のお寺だと騒がれた、「(株)お坊さんドットコム」の林社長(天台宗の正式僧侶)もパネラー

の一人であったことです。敢えていえば、

仏教界側からみたら、この両者は「獅子身中の虫」(仏徒でありながら、仏法に害をなす者)的存在であったはずであり、本来なら仏教界を代表する全仏の正式な行事に出席を要請するなど、あり得なかったからです。そのことをいみじくも、林社長は冒頭の挨拶で「私がここに呼ばれるなんて、あり得ないと思っていたから、実に驚きです」と率直に話されておりました。

このことは解釈によっては、仏教界の代表者(少なくとも窓口)である全仏から、イオンの事業や、林社長の僧侶でありながら株式会社の形式をとり、御布施や卒塔婆にも消費税を付けて受取ることをはじめ、この両者に共通する、御布施に定価をつける行為などを、承認したかの如く受け取られ兼ねない恐れがあると思います。

「一人の現役住職の出席によって

「この行事が救われた」

まずこのシンポジウムのパネラーを発表順に紹介します。佐伯美智子氏(日本消費者協会課長)は、消費者の葬儀に関する各種の統計を資料を元に解説された。二人目は、広原章隆イオンリテール事業部長で、イオンの葬儀の特徴や、僧侶紹介事業の説明があった。消費者の要請でこの事業に参入したことや御布施の金額に定価を付けたことの事情を話された。三人目は株式会社で、イオンとほぼ同じ事業をイオンよりも早くから展開する(株)お坊さんドットコムの林数馬社長でした。彼の主張である「寺院は仏教を広め伝える施設であり、仏教は寺院維持の為の教えではない」。高額なお布

(次頁へ)

施を強要する寺院があることを知ったのも、

この会社を設立した理由の一つでもある。

同社はお寺と同様の法務収入からの収益により税金を払う事により社会に貢献しようとしている、との主張をされた。

ここまでの発表者の話を聞いていると、

佐伯氏のデータ解説は別にしても、全く仏教というものを収益確保の一手段であるかの如き発想を、「これが新しい社会貢献だ」と言わんばかりに聞こえてきたのは私だけではあるまい。またこのような主張を事前に分かっていながら、登壇させたい、彼らの発言に「異論を唱えたり、仏教界の立場とは違うという釘を刺す訳でもなく」一方的に営利企業の論理を垂れ流させた主催者にも、違和感を覚えました。つまりこの行事そのものが営利企業による事業発表会の様相を呈していたからです。

ところが最後に登壇した互井観章師（仏

教情報センター事務局長・教王寺住職）は、

これら企業とは一線を画し、「布施をサービスの対価と位置付けることや、定価を付けることへの異議」を唱えたいと、「人を弔うことの本来の意味を仏教者が説いてこなかったため、葬儀を単に「面倒だ、死者を処理する儀式だ」と考える人が増えてきたと指摘。また互井師は、最近軽視されがちな戒名の意味についても、「位牌に書かれた文字を通して個人の声を思い出し、仏の教えを聞くのが戒名。仏教的な葬儀をするなら、あっても当然」と明確に論破された。この他にも、本来お寺の行うべき葬儀の本筋論を分かりやすく述べられました。終わった後、大勢の出席者から「あの最後の住職がいたから、今日の行事がなんとかなったなあ」と。正に本物の住職の存在によって初めてこの行事の「価値」が

保たれたと言えるようです。

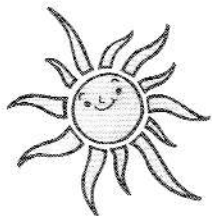
県技能マイスターの出前講座

天峰建設代表取締役 澤元教哲

去る六月三十日（木）、静岡県藤枝市下青島の青島小学校で、七月二十二日（金）には静岡県静岡市清水区の中河内小学校で、県技能マイスターとして出前講座をしてまいりました。

平成二〇年三月に県技能マイスターと認定されてより、後進の育成を目的に様々な活動に従事してまいりましたが、こうした小学校への出前講座もそうした活動の一環であります。

小学生では色々な夢を持っていたり、まだまだ将来のことを何も考えてなかったりと、すぐに宮大工の後進の育成には結びつかないかもしれませんが、学校で教える勉強とは違う話を聞いて、実社会に早くから興味を持ち、目標を持つことの大切さを少しでも理解してくれたのであれば、たとえ宮大工を目指してくれなくてもそれぞれの人生にプラスになったと思います。



知って得する



再生可能エネルギーの話

明け方などようやく涼しくなってきたので、ほっとしてこの夏を振り返ると、東京電力の福島原発の事故の様々な影響で、例年以上に夏の電力不足が危惧され、節電が呼び掛けられていました。それと並行して「脱原発」や「再生可能エネルギー」などの言葉もよく耳にしました。今回は再生可能エネルギーのお話です。

再生可能エネルギーとは、単純に再生が可能なエネルギーのことかと思ったら、ちよつと違いました。古紙や空き缶、空き瓶の様に、再利用できる資源とも違います。電気は消費すれば無くなるし、燃料も燃焼すれば別の物質に変化してしまいます。電気や燃料は勝手に再生してはくれません。また、燃料が燃焼した後の排ガスから燃料を再生することは理論的には出来るでしょうが、燃焼によって生じる以上のエネルギーが必要になるでしょう。

では、再生可能エネルギーとは何かというと、対義語の「枯渇性エネルギー」から考えるとわかりやすいと思います。枯渇性エネルギーは石油や天然ガスなどの化石燃料やウランなどの地下資源をもとにしたエネルギーのことで、埋蔵地下資源を消費し尽くしたら文字通り枯渇してしまうエネルギーのことです。それに対して再生可能エネルギーとは、エネルギー源としてまず枯渇する心配のないと思われるものを利用するエネルギーのことです。

再生可能エネルギーの例としては、太陽光、水力、風力、波力、潮力、地熱、バイオマス（バイオ燃料）などがあります。ほぼ無尽蔵にあると思われるエネルギー源を利用する再生可能エネルギーは、夢のようなエネルギーですが、それぞれ弱点や短所も持ち合わせています。太陽光なら夜間や悪天候、水力ならダム

建設の自然破壊と堆積土砂、バイオ燃料は穀物の不作や食糧難の助長などです。また、自然のエネルギーに頼るものが多いため、原子力発電や化石燃料を用いる火力発電に比べると、発電量を増大させることが難しいのです。

ただ、枯渇性エネルギーが将来使えなくなるであろうことを考えれば、今後ますます再生可能エネルギーに依存していかねければなりません。太陽光発電の発電効率やコストは、年々改善されています。技術の進歩によって再生可能エネルギーの弱点も少しずつ克服されて行くでしょう。新しい再生可能エネルギーが開発される可能性もあるでしょう。枯渇性エネルギーが少しでも長く使えるようにするために、一人一人が節電に心掛けることが大切です。一般住宅へ太陽光発電を取り入れて行くことも有効です。太陽光発電の相談は天峰建設へ。